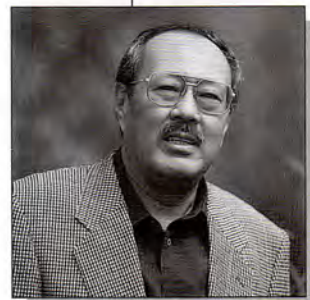


佐佐木幸綱百首

島田修二 選



佐佐木幸綱

肥り気味の黒豹が木を駆け登る殺害なさぬ日常淫ら

泣くなラガーよ胸ひとつ幅隔てつつ明日立つ前に敗戦満つる

水と水と絡み抱き合い震えゆき大河を持たず日本の冬

さむい川だが渦巻き走り進みゆき潔しいつさんに過ぎゆくものは

性欲の錐揉みしつ降り来るを怒り鎧える真の兵たれ

汗のシャツを汗のサイゴンに脱ぐときの祖国への愛みだりがわしき

飾るべき花は何の花千本の警棒けん山のごとく輝き

カツサンドほおぼる口を見られて対岸の火事此岸の食事

ゆく秋の川びんびんと冷え緊まる夕岸を歩き鎮めがたきぞ

『群衆』

生きのびて恥ふやしゆく 日常は眼前のカツ丼のみだらさ美しき

見よ大地静かに割れて土葬待つ 卑怯ならざる一生あるか

さむぎむと吾は国見の歌うたうはるか来て又貧を知りにき

予備校の模試の成績貼られあり点・点・天まではあがれぬ吾ら(学生)

寄せては返す(時間の渚)ああ父の戦中戦後花一匁

死がすなわち鋼のごとき寒さなら遅れし吾も今日寒くいる

岸壁を見上げて君が立っている青春は(立ち)断て(発つべし)

おそらく君の内部の岸辺ためらえる吾の四周に潮満ち来たる

星月夜夜汽車走れり血走れり吉か不吉か近き夜明けは

『直立せよ一行の詩』

『男魂歌』(合同歌集)

父の胸坂のほりつめたるま悲しきぬばたまの夢冬の鷹の眼

しつ、静かに！ 春画の女の生き様の生き生きとして贅肉厚し

直立せよ一行の詩 陽炎に揺れつつまさに大地さわげる

肉が肉生み恥が恥生むかなしさの水際に立ちて歌わんものを

敷島の大和言葉の海にして川と直立つうたを愛せり

君は信じるぎんぎんきらきら人間の原点はかがやくという嘘を

戦後の飢えはすなわち人の悲しき目変声期待つ吾を焼きにき

鉄橋を越す轟きにつつまれてわたくしが越す戦後二十年

父はその父を脱して子を育てし当然なれど子の吾を涙ぐます

月下独酌一杯一杯復一杯はるけき李白相期さんかな

心の鳥を撃つ男らの群の向こうエイハヴはもう来ないのだろうか

学生からの電話に暗く答えしのみ関わりを断ちたき情の土砂降り

いまは山中いま人生のどこの森再びは見ぬ緑過ぎゆく

詩歌とは真夏の鏡、火の額を押し当てて立つ暮るる世界に

竹は内部に純白の闇育て来ていま鳴れりその一つ一つの闇が

ゆく水の過ぎにし父よ、霧深き川にかかれる橋渡りゆく

『夏の鏡』

瀑布なす父の怒りを知る者は吾を措きてなし、見よ逆立つ血

おりるならおりよおりよと泣いて言う若きわが声、遠き寒雷

轟と来る「時間」の戦車やりすごすため飲んで一杯呑屋

起きて酔い寝ねて夢中に酒を飲むいづくの春ぞくれぐれの花

徳利の向こうは夜霧、大なる闇よしとして秋の酒酌む

欲りするは無頼と答うる年齢を過ぎざんざん浴ぶる初夏の水

戦わぬ男淋しも昼の陽にぼうつと立っている夏の梅

ぬるぬるの弁明をする舌、舌、舌、舌、生きてる愛している、夕暮酒場

おのずからけぶれるまでに咲ききりて生きたきものを、明日へ漕ぐのみ

夏野行く夏野の牡鹿、男とはかく簡勁に人を愛すべし

鉄を打つ音、思えば十日迷いおりぬ読み人知らずの歌の林に

てのひらの天道虫をいじめおり行けども行けども手の野つづくぞ

のつべりした午後とぞ思う、暗き穴を覗きつづける男が見えて

土砂降りの夜に聞くラジオの歌謡曲義理欠きお茶碗欠いたのは誰？

内面という語の淡き頼りなき知りつつを書く書くは危うき

俺らしくないいないなとポストまで小さき息子を片手に抱いて

『火を運ぶ』

『反歌』

はにかんで五月のひかり、野のひばり、わかるよ、戦後少年なりき
60年代の月赤かりき若かりき赤坂見附、坂も変わりぬ

帆のごとく過去をぞ張りてゆくほかなき男の沼を君は信じるか

あい変らず鯨の刺身を食っているよ生きのびて飲む酒の肴に

新宿に今は無き道確かめ居つべらばうめなせなせなせなしかめる

孤独とは清しき鋼はな、過不足なき完璧な一枚として立ったり

政治の季節過ぎつやつやの感性の過剰の時代のビニールの傘

草を焚く火を見て立てばもう一人火を見る男向こうに立てり

火種抱くからだにからだ重ね来てざぶりと秋の水かぶりたり

傘を振り雫はらえば家の奥に父祖たちか低き「おかえり」の声

『金色の獅子』

父の土地を気易く売って二十年、軽かりしかな若かりし日は

数うれば五人十人さよならを言いて別れし一人もあらず

微かなる刃こぼれありし一振を夜に入りて吾は心に立たす

ひばり啼く東あづまの味噌の味噌汁に摘み来たる芹刻みて入れよ

西行は何故東国たひがゆに来しならんさざさんと川すこき夕ぐれ

祖父・父・我・我・息子・孫、唱うれば「我」という語の思わぬ軽さ

寒雷のとどろとどろく川底に身を透かせつつ雌を恋う雄

若鮎わかあせのあぶら小さき炎上ぐ遡なほりきることなかりし命

角重つのき雄鹿ぞわれは食い足りてただうっそりと目をあけている

文芸は一代ひとよを越えんしかすがに永遠へ吹く風の冷たさ

抱き上げて子に見せてやる実らざるゆえ楽しかる罫の冥想

荒々と寄り添うものを樹の蔭に雄を見ず立つ不機嫌の雌

僧形のむかしの歌人、今の世に歌人なんぞや居れるか、雁よ

ふろばより走り出て来し二童子の二つちんぽこ端午の節句

火も人も時間を抱くとわれはおもう消ゆるまで抱く切なきものを

『瀧の時間』

大いなるユリの木残り去りゆきしへミングウェイと七月の雲

冬帽の昭和天皇かあきいろの馬と落葉と焚きはじめたり

壁を越えし雲の総数 歲月かきの量 越えられざりしものの数々

地上には雪降る夜の地下鉄にさくらをいたき過去へゆくひと

汚名着て夏の日を行くひとつかけズームレンズにフセインの髭

三毛猫の夢にひねもす日は照りて万葉集の海行くわれは

暗き時代を恋うごとく学生にしゃべりゆく暗さゆえ輝くくさぐさあるを

ゆく秋の夜を澄むほどに酒のめば生に限りあることも遙けし

簡潔に立つたる冬の梅の木の人居ねば不意に流涕したり(悼 野間宏)

スカッド・ミサイルを飾れる表紙霧の街に高く積まれて人ら群れたり

朝霜を踏むよろこびと高そらを飛ぶ雁がねとよろこびいずれ

梅の木はおのれに花を飾りつつ樂しげに死へ一つ老いゆく

朝焼けの空にゴッホの雲浮けり捨てなばすがしからん祖国そのほか

自転車のような瘦せ男自転車に乗りきてわれにエアメール渡す

いつわりとまことの境ゆくためにむかしも歌につばさはありき

夏草やわれを打つ風の早さ早さワテルローはただ雨のなか

「旅人」

はじめの郭公の声今日聞けり古代たましいは鳥に廻りぬ

昨夜の雨に早くも落葉 黄の色も無常も降らす時間の雲は

何もない地平へ吹けるあまつ風くにつ風遠く白夜の風車

戦争が夕焼けている空へ向き次々と機首を上げて消え行く

旅人の立場というを生きぬける末法の世の歌僧の孤独

おぼえておけ身を浮かす意味人の世の国境という縫目なき地球

乱暴に生き居しころは見え居たる簡潔な生、君は遂げしか

白鳥を浮べしは去年月の斑を浴びてぜんしんを凍らす運河

旅人われに古典のごとき夕風の時間、さびしき鷗とび来よ

歌の表記・ふりがなは原則として歌集に準拠しています。

佐佐木幸綱は第一歌集『群黎』のころから現在に至るまで

実に川を歌うことの多い歌人だが、単に偏愛する題材を越えて、つとに幸綱短歌のライトモチーフとなっているように思う。一刻もとどまることなく、しかし脈々と尽きぬ豊かな水の流れを川と呼ぶならば、幸綱が歌いつづける川の表情や風情あるいは物語はまさに歌人のこころと生の暗喩であり、象徴なのである。掲出百首に引いた川の歌はとりわけ鮮烈な印象を放つものばかりだ。

幸綱は戦後日本の情況を見すえたシャープな社会派歌人であるが、

ほぼ編年的な百首をみれば歴然としているように、年を追って苦渋と混迷の色を深めて来ている。これは彼が文学的に誠実であることの証しであり、くぐもりがちな近詠はむしろ深い味わいを湛えているだろう。そこにはかつての清冽なる濱つ瀬は失われたかも知れぬが、濁りを帯びながら、ゆつたりと人生の時間を下る大河のたたずまいがまぎれもない。島田修三(しまだ・しゅうぞう)「まひる野」(編集委員)